「女性が「当たり前に登山できる」ように」
女性委員会スタート

全国各地で労山の登山活動が活発化するにつれて女性の登山も活発になり、女性向けの学校も行われるようになった。１９６８年には九州で「女性のための登山学校」が開催された。１９７２年には東京都連盟で「女性のためのリーダー養成学校」が実施された。

第１回女性と登山全国集会　1976年　兵庫県西宮市

「山と仲間」（１９７２年９月号）では「登山と女性」と題して、38ページにわたる特集が組まれた。この特集では、①女性登山の特殊性、②女性の登山―医学的にみて―、③女性登山者へのアドバイス、④女性のためのリーダー養成学校（東京都勤労者山岳連盟・教育遭対部）⑤私の登山―各世代の声―が紹介され、「女性と登山」の未来を作り出す大きな芽生えとなっていった。

「山に行くならお嫁に行け！」――親が言うこんな言葉が、１９７６年６月に兵庫県・西宮市で開催された「第１回女性と登山に関する全国討論集会」報告集に収録されている。

当時の社会はまだ、「女性は大きな荷物を担いで山に行くのではなく、女らしいお稽古を」という風潮だった。会のなかでせっかく登山技術を共に学んだ女性会員が、結婚や適齢期でだんだん少なくなり、新しい会員を再度教育しなおしていく繰り返しだった。

また、こんな話もあった。福岡県のある会で、テント山行を実施した際に、夜10時ころまでテントが立たなかった。主だった男性会員が仕事の都合で参加が遅れ、女性はたくさんいたのにテントの立て方を知っている人がいなかったのである。

こうした女性のかかえる様々な問題を話し合い、解決の道を探ろうとの取組みが、１９６０年代末から始められた。

●１９７６年第１回女性集会を機に大きく広がった取り組み

労山のなかで、女性の活動を担当する組織の名称は、当初は

「婦人部」だった。これは、全国連盟が１９７７年５月に大阪で「第１回全国婦人部活動者会議」（50名参加）を開催したために、各地方連盟にも広まったものである。

しかし、自立していこうとする女性たちは「婦人」よりも「女性委員会」の名が適切として変えていった。このような女性たちの変革の意識の強さから、80年代に入って各地方連盟でも順次「女性委員会」に統一されていった。

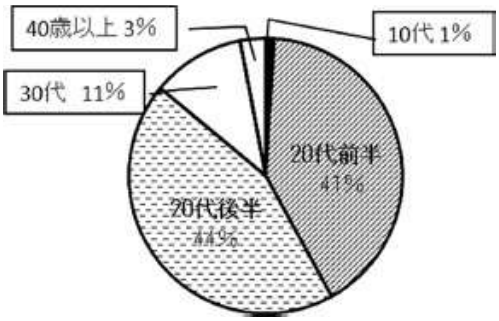
混み合う女性集会の受付風景

１９７２年に兵庫県・西宮市で開かれた第３回全国登山研究集会では、９分科会の一つとして、初めて「女性と登山」がテーマになり、30名が参加した。「全登研」女性分科会の参加者は57名（１９７３年）、70名（１９７５年）と回を追うごとに増加し、話し合われる内容も多岐にわたった。このため、独自の全国集会に発展させることになり、１９７６年６月に第１回「女性と登山についての全国討論集会」が兵庫県連主管により西宮市で開催された。この集会は、男性も含め33地方連盟から４１７名が参加する大規模なものとなった。女性の全国的な集まりは、母親大会とか、教師のあつまりとか少なくないが、スポーツの分野や登山の世界では前例のないことであり、画期的なことだった。

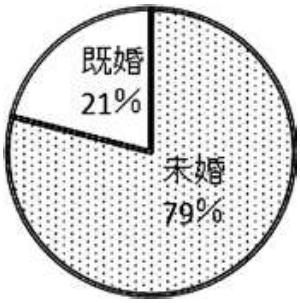
参加者の構成では30歳未満が86％を占め、今とは隔世の感がある。未婚者の比率も79％だった。当時は、女性だけでなく、男性も含めた労山全体が、こうした年代構成だった。

この集会の成功をうけ、その年（１９７６年）12月、全国連盟常任理事会は「女性と登山全国連絡委員会」を設置し、翌１９７７年２月の全国代表者会議で、正式に女性部門を担当する組織として提案・承認された。その名称も、１９７９年には「女性委員会」の名が使われている。また、集会の名も第３回（１９７９

第１回女性と登山全国集会
参加者の構成



既婚・未婚別



年）から「女性と登山全国集会」に変更され、１９８６年の第６回（愛知県瀬戸市）までの延べ参加者数は２３００名に達した。

なお、70年代には地方連盟によって、まだ「婦人部」の名が使われるところもあったが、80年代に入って、全国的に「女性委員会」に統一されていった。

全国連盟に置かれた女性委員会には、当初は委員長が存在せず、湯下美代子事務局長を中心としていたが、１９７９年からは女性委員長が選任され、初代委員長に高橋孝子さん（東京・日黒勤労者山岳会＝現・めぐろ山学クラブ仲間）が84年まで在任した。

１９８８年からは、女性委員会のなかった地方連盟にも女性委員会を作ろうと、それまでの都市部での集会ではなく、地方に出向き、その集まりのなかに登山を組み込んだ形で、女性のための集会が開催されるようになった。それが「全国女性交流集会と登山」である。その第１回は１９８８年９月に宮城県栗駒山で、第２回は同年10月に徳島県剣山で開催された。この集会はその後、増大する参加者数に対応して東西に分けられ２年に１回、開催され、近年ではまた統一して開催されるようになった。

女性の置かれた社会状況と未来
古賀昌子（熊本勤労者山岳会）

女性にとっての登山は、青春の一時期の「楽しみごと」にすぎず、いわゆる「おけいこごと」以下の地位におかれ、さらにはまた、たとえば母親が子どもから離れて登山を楽しむなどもってのほかとされています。

古い人間観、古いスポーツ観、古い結婚観がいまなお生命を持ち続けており、否応なく登山者としての女性を制約している―そのことが、登山における男性と女性の相違（運動能力においても機能・技術においても）を生み出しているように思われるのです。そして、「女性のための登山学校」が必要な理由も、そこにあると言えるのではないでしょうか。

未来を夢見ます―ことさらに「女性と登山」を論じなくともよい未来を。そして、その未来をつくりだす力の芽生えを、胎動を感じるのです。登山を愛好する女性の圧倒的多数が「労働婦人」であるという事実、それが男性との協同・協力の可能性をつくりだし、女性をその本来の地位につかしめるだろうと、確信させるのです。

「山と仲間」（1972年９月号）
「登山と女性」特集・巻頭言より

第Ｉ回女性集会　分散討論会